



## 小さな海に囲まれて



信州大学人文学部人間情報学科准教授

菊池 聡 (きくち さとる)

1986年、京都大学教育学部卒業。1993年、京都大学大学院教育学研究科単位取得退学。翌年より信州大学人文学部講師、助教授。専門は認知心理学。主な著書は『「自分だまし」の心理学』(単著、祥伝社)、『超常現象をなぜ信じるのか』(単著、講談社)、『経済心理学のすすめ』(分担執筆、有斐閣)など。

私が暮らす信州・松本は、四季折々の美しい自然に恵まれた快適な高原都市です。ただ、ひとつ残念なのは、見渡す限り山また山で、海ははるか彼方になってしまうこと。日本列島で最も海と離れているのは、この長野県中部だそうで、海の空気が吸いたくなると小旅行が必要な土地柄なのです。

そこで一念発起、海好きの私としては、身近に「海」を再現してみようともくろみました。めざすは、小さな海の向こう側に、雪をいただく北アルプスの山々をはるかにのぞむ、という生活です。

子どものころから淡水の生き物なら、さまざまに飼ったことがあります。海の再現となると、これは手が出せませんでした。海水の確保が一大事であるだけでなく、丈夫な淡水魚にくらべると、海の生き物は水質、光、温度にかなりデリケートなのです。しかし、いつのまにかテクノロジーは長足の進歩をとげ、高品質な人工海水や濾過装置が簡単に手に入ることを、ある日知ってしまったわけです。

かくして、最初はホームセンターで買った小さな水槽に、念入りに調整した人工海水を満たし、丈夫さで定評のある青いスズメダイをおそろおそろ泳がせてみました。するとそこに、あこがれの南の海の風景が忽然と姿を現したのです。

「やっぱり海はいいなあ」

とても小さな海ですが、時間を忘れて眺め暮らす毎日を堪能できました。しかし、恐ろしいことに、それは「海」のように見えていながら、

実は「底なし沼」だったのです。

もともと凝り性だったからなのか、根っからの実験好きがこんなところに現れたのか。水中の不純物を泡で分離する装置、紫外線殺菌灯、逆浸透膜浄水器とテクノロジーの投入が止まりません。そのうえ、水質の変動を抑制するために水槽は大きければ大きいほどよろしく、また生き物の種類が増えるにつれて、相性の問題から水槽の数も増やさなければなりません。

かくしてリビングが何本もの水槽で埋め尽くされるのは時間の問題でした(さすがに現在では、引っ越しを機に大幅削減のやむなしに至っています)。

しかし、それだけの苦勞の甲斐があったと思います。海の生き物は、とても不思議な生態を見せます。クマノミは、イソギンチャクのベッドにくるまれて眠っています。小さなハゼはエビと一緒に巣穴に協力して暮らしています。太陽光を再現するメタルハライドライトのおかげで、色彩豊かな珊瑚(ソフトコーラル)の仲間もどんどん成長し、海から採取された岩(ライブロック)には、次々と不思議な生き物が発生してきました。珍しいところでは、カブトガニも養殖されていて簡単に手に入るとは知りませんでした。

ハリセンボンなどフグの仲間は、すぐに人に慣れて、水面でさかんにエサをねだるようにもなりました。愛嬌ある仕草についてエサを与えると、これが随伴性の学習となるわけですが、強化されてい

るのはフグなのか私なのか。

考えてみると、心理学というのは、文系の学問の中ではかなり例外的に生き物を扱っています。伝統的にネズミやハトが代表でしょうが、金魚の実験というのもありました。しかし、現状を心理学にこじつけるならアニマルセラピーそのものかもしれません。

わが家の小さな海の中で、そんな癒しの生き物のナンバーワンは、タツノオトシゴ。しっぽを海藻にからませて、水流にゆらゆら揺れている姿は見飽きることはありません。ただ、タツノオトシゴの飼育はとてつらく、環境に慣れないと生きた小エビしか食べないという偏食ぶり、冷凍エサを食べるようになるまでかなりの苦勞が必要で

この新年は、そのタツ年。いろいろと日本中が厳しい環境下がありますが、悠然と構えるタツ君のように、着実に研究と教育に取り組みたいと願っています。

そんなわけで、小さな水槽を大学の研究室にも置いてみました。信州においでの際は、ぜひ不思議な海の生き物を訪ねてください。



のんびりと水槽をおよぐタツ君